

致仕すべきや否や？

— 白居易の致仕に関する詩をめぐって —

周 雲 喬

1. はじめに

高知大学を去る日が近づくにつれ、「定年退職」という言葉を耳にする機会が多くなった。今まではまるで気にとめもしなかったのだが、ああ、いよいよ定年が近づいてきたのだな、とこの言葉を意識せざるをえなくなった。日本には「立つ鳥跡を濁さず」との諺があって、何も言わずに静かに立ち去るのも男の美学と思ったが、お別れに一声くらいは鳴いてから飛び立つのも礼儀かも知れないと考えて、この一文を草することにした。

さて、定年退職を意味する現代中国語は「退休」である。文字面からもわかるように、中国語では年齢規定によって職場から退くだけでなく、体を休ませるという意味合いがある。日本語の定年退職が職務から退くことだけを意味する素朴な表現であるのに対して、中国語では「退く」に「休む」をとりあわせて、老後はゆっくり休もう、余生を享受しようという意味が含まれているようである。

さらに日本語の場合、規定年齢で退職する言い方は官民によって異なっている。民間では定年「退職」と言うのに対して、国家公務員を始めとする官僚は「退官」である。ちなみに昔の国立大学教員は紛れもない「官」だったので、定年で辞めるのは当然同じく「退官」と称した。しかし、今やかつての国立大学は独立行政法人という半官半民機構となり、「退官」という表現は使わなくなった。半人前はどこまでも一人前ではないように、半官身分では一人前に「退官」とは称せぬわけだ。この官民の厳しい区別は何も日本独自のものではない。古く中国にも退官には特別の言い方があったのである。

昔の中国では官位から退くことを「致仕」と称した。古くは『春秋公羊伝』（巻十五）の宣公元年に「退而致仕」と出てくるからずいぶん古い言葉だ。漢の何休という学者は「致仕は祿位を君に還すことである。」と説明している。由緒ある言葉ではあるが、いつしかこの言葉は使われなくなり、今は辞書の中で静かにお休みになっている。現代中国では「致仕」そのものが「退休」してしまっているのである。

本稿では致仕について考えてみるのだが、そんな古い言葉を揺り起こしてどうしようというのか？ 私が思うに、表現は古くても、退職も就職と同様に人生の一大事であることはいつの時代も変わらない。若者が就職するにも世間の不条理との悪戦苦闘があるように、退職をめぐっても世間の複雑な事情がからんで、なかなか一筋縄では行かないものなのだ。それでは、「致仕」が現役だった唐代にまで遡り、古人の退官をめぐる事情とそれに絡む人々の思いの一端を探って話柄を提供したい。

一、致仕の年齢と老齡年金

定年制度は中国では大昔から存在している。紀元前のいつとも知れぬ頃から退職年齢は七十歳と定められ、当該年齢ともなれば、自ら辞任するのが官僚世界の伝統であった。儒家の五経の一つ『礼記・曲礼上』に「大夫七十而致事（大夫は七十にして事を致す）」と規定され、漢の鄭玄の注釈では「致其所掌之事於君而告老（その掌るところの職務を君にかえてして退職する）」と説明されている。ちなみに「致事」は「致仕」と同じ意味である。

また同じ『礼記・曲礼上』には「七十曰老、而傳（七十を「老」と曰い、そして伝える）」とあって、鄭玄は「傳家事、任子孫（家事を伝えて子孫に任す）」と注している。即ち国政だけではなく、この年齢になれば、家庭内のことも次の世代に任せるのである。このように一応は定年規定があったわけだが、考えてみるに、紀元前の人間の平均寿命は甚だ短かったはずである（おそらく三十前後か）。孔子などは七十余歳まで生きたが、これは異例な長寿だった。ずっと後の唐代でも「人生七十古来稀なり」（杜甫「曲江」詩）だったのだ。これは何も詩的レトリックとばかりは限らない。衣食住を保証された皇帝ですら、七十以上の寿命を保ち得たのは歴代数えるほどしか居ないのである。そうしてみると、ほとんどの人は病気でない限りは死ぬまで働いていたはずで、この規定には少々苦笑せざるを得ない。

ともあれ、年齢によって仕事を辞めさせるからには、慰労の意を含めて退職後の生活が成り立つようにしてやらねばならない。いわゆる老齡年金制度は、中国では漢代にはすでに始まっていたらしい。班固の『漢書・平帝紀』（卷十二）によると、高級官吏は退職した後も俸禄の一部が支給され、老後の生活が補助されることになっていた。

天下吏比二千石以上年老致仕者，叁分故祿，以一與之，終其身。

天下の吏で二千石以上の俸給で年老いて致仕した者はもとの俸禄の三分の一を与え、終身の助けとする。

これが年金制度の起源だと思われる。支給資格が高級官吏限定であるところが何ともやるせないが、これは時代の限界というもので、制度がないよりは大きいマシである。そして、この制度は代々引き継がれ、唐朝になっても漢代と同じく、致仕した高級官僚にはもとの俸禄の一部分が支給されていた。杜佑『通典・致仕官祿』（卷三十五）に「大唐令、諸職事官年七十、五品以上致仕者、各給半祿（大唐令によって諸もろの職事官は七十歳で、〈官位〉五品以上の致仕した者には各々半祿を支給す）」と記されている。この法令は実際に施行されてもいて、白居易は致仕後に、「半俸身を資して亦た餘り有り」（「刑部尚書致仕」詩）と詠じている。

ただ、白居易も当時としては例外的長寿を保ちえた人であり、彼のように七十歳の定年まで無事に勤めあげて、晴れて老齡年金を支給される幸福な人間はめったに居るものではなかった。そのような彼らからすれば、「七十にして致仕」するのは、人生の幸福ここに極まれりだったはずである。では「七十をこえて致仕」せざる場合はどうだったか。奇しくも白居易の同時代に対照的な致仕をした二人の人物が居た。以下、白居易の「高僕射」¹及び「不致仕」²という二つの詩を通して退官をめぐる大人の事情を探ってみる。

¹ 『白氏長慶集』卷一、「諷諭一」。

² 『白氏長慶集』卷二、「諷諭二」。

二、高僕射の致仕

日本では白居易の代表的作品は？と問えば、「長恨歌」！と答えが返ってきそうだが、中国では従来から新樂府五十首と秦中吟十首が彼の代表作と見なされてきた。いずれも元和四年から五年の間に作られ、さまざまな社会問題を取り上げ、弊政を批判した作品群である。この両群それぞれに致仕に関する作品、「高僕射」及び「不致仕」が収められている。つまり、当時致仕にまつわる社会問題があり、白居易はそれをわざわざ二度まで詩に詠じたわけである。人材登用ならまだしも、定年退官にどのような問題があったのだろうか。まずは「高僕射」の詩から見て行きたい。なお、詩題の「高僕射」の高は姓で、僕射は官名である。この高僕射なる人物については後ほど詳しく触れることになる。

「高僕射」

富貴人所愛、聖人去其泰。
 所以致仕年、著在禮經内。
 玄元亦有訓、知止則不殆。
 二疏獨能行、遺跡東門外。
 清風久銷歇、迨此向千載。
 斯人古亦稀、何況今之代。
 遑遑名利客、白首千百輩。
 唯有高僕射、七十懸車蓋。
 我年雖未老、歲月亦云邁。
 預恐耄及時、貪榮不能退。
 中心私自徹、何以為我戒。
 故作僕射詩、書之於大帶。

【訓読】

富貴は人の愛するところ、聖人はその泰を去る。
 致仕の年 著して禮經の内に在る所以なり。
 玄元も亦た訓え有り、止まることを知れば則ち殆うからずと。
 二疏獨りよく行い、跡を東門の外に遺す。
 清風久しく銷歇し、此に迨ぶまで千載になんなんとす。
 斯のごとき人 古も亦たまれなり、なんぞ況や今の代においてをや。
 遑遑たり名利の客、白首 千百輩
 唯だ高僕射のみありて、七十にして車蓋を懸く。
 我が年は未だ老いずと雖も、歲月亦たここに邁く。
 預め恐る 耄の及ぶ時、榮を貪って退く能わざるを。
 中心に私に自ら徹むるも、何を以て我が戒と爲さんや。
 故に僕射の詩を作り、これを大帯に書きおかん。

【大意】

富貴は誰であっても好まぬ者はないが、聖人は高位に居続けて横暴とならないようにしたという（『老子』に曰く「聖人は甚を去り、奢を去り、泰を去る」³と）。致仕の年齢が『礼記』に明記されている所以である（『礼記』に曰く「大夫七十にして事を致す」と）。老子もまた止まるを知れば、危険はないと教えている（玄元とは老子を指す。唐の高宗の時代に老子に奉られた称号「玄元皇帝」による。『老子』曰く「足るを知れば、辱められず、止まるを知れば、殆うからず、以て長久なるべし」と）。漢代の疏広・疏受⁴はそれぞれ俸禄二千石の高官となったが、叔父である疏広は甥子の疏受到「足るを知れば、辱められず、止まるを知れば、殆うからず」の訓戒を語り、二人ともに病気を口実に辞官し、公卿、知人らは東門の外に饞別の宴を設けて見送った。この定年退官の美風は長くすたれてしまい、はや千年にもなろうか、昔の人でも稀だったのだから今の時代なら尚さらだ。

今の世は名利にあくせくし、白髪頭になっても地位にしがみついている輩がうようよしている。ところが世の大多数の人間とは対照的に、高僕射だけは七十になるとすっぱりと官から退いた。私はまだ年老いてはいないが、歳月はどんどん進んでいく。今から恐ろしいのは、自分も耄碌すれば、地位に未練を残し、引退を決断できないことである。心中ひそかに自らを戒めようと思うが、何を以て教戒としたらいいだろうか。そうだ、僕射の詩を作って、帯に書いておくこととしよう。

このように高僕射が地位実利にこだわらず、七十で致仕したことを白居易は褒め称える。これは当時の官僚中に富貴栄華に執着し、齢七十となっても退かない例があったために違いない。詩中の「遑遑名利客、白首千百輩」つまり、白髪頭になっても地位にしがみついている輩がうようよしている、と言うのは事実であるよりも（再度言うが、「人生七十古来稀」だった）、詩的なレトリックと考えたらよい。そう言うことによって、高僕射のような人物が稀有であることを際立たせるのである。

さて、日本人からすると、このようなことを詩に詠うことに違和感があるかも知れない。白居易がこのような作品を作ったのは、詩歌によって諷諭する、即ち政治の弊害を指摘批判するのが、中国では『詩経』以来の伝統だったからである。白居易もまたその正統的後継者を以て自任していたのである⁵。彼はまじめに善を勧め悪を懲らし、政治の得失を見抜いて社会正義の実現に資するのは文学作品の役目だと考えていた。しかも白居易はこの時期は左拾遺の職にあった。これは天子の欠点や国政上の過ちを諫めて正すことが職務なのである。しかし彼が「三年作諫官、復多尸素羞（諫官の職務を三年間務めたが、俸給分の働きができていない）」⁶と嘆いたように、政治的な制約によってあらゆる政治、社会問題を指摘しつくすのは不可能だった。そのため諫官としてだけではなく、詩人としても政治と社会を諷諭することに努めたのである。

³ 「泰」の解釈には諸説ある。唐代の『老子』解釈の主流だった河上公章句では、「泰は宮室台榭を謂う」とするが、「驕恣」の意であると解釈したものもある（高亨『老子注釈』参照）。

⁴ 『資治通鑑・漢紀』（卷二十五）に『太傅疏広謂少傅受曰：「吾聞『知足不辱、知止不殆。』今仕宦至二千石、官成名立、如此不去、懼有後悔。』即日、父子俱移病、上疏乞骸骨。上皆許之、加賜黃金二十斤、皇太子贈以五十斤。公卿故人設祖道供張東都門外、送者車數百兩。道路觀者皆曰：「賢哉二大夫！」或嘆息為之下泣。』という。

⁵ 例えば、彼は次のように述べている。「古之為文者、上以初王教、繫國風；下以存炯戒、通諷諭、故懲勸善惡之柄、執於文士褒貶之際焉；補察得失之端、操於詩人美刺之間焉。」（『白氏長慶集』卷六五、「策林・六十八議文章碑礪詞賦」）

⁶ 「適意二首」其一（『白氏長慶集』卷六、「閑適」）

三、某高官の不致仕

上で紹介した「高僕射」の姉妹篇とも言える「不致仕」の詩が秦中吟十首に収められている。同じく致仕に関する問題を取り扱い、創作の時期も近いと考えられている。これは高僕射とは対照的に七十歳になっても致仕しない老害的人物を辛辣に風刺した作品だが、詩題は「不致仕」とのみ言い、特定の人物名はどこにも出てこない。それでは、先ずはどのような詩であるかを見てみよう。

「不致仕」

七十而致仕、禮法有明文。
 何乃貪榮者、斯言如不聞。
 可憐八九十、齒墮雙眸昏。
 朝露貪名利、夕陽憂子孫。
 掛冠顧翠綉、懸車惜朱輪。
 金章腰不勝、僂僕入君門。
 誰不愛富貴、誰不戀君恩。
 年高須告老、名遂合退身。
 少時共嗤誚、晚歲多因循。
 賢哉漢二疏、彼獨是何人。
 寂寞東門路、無人繼去塵。

【訓読】

七十にして致仕するは、禮法に明文有り。
 何ぞ乃ち榮を貪る者の、斯の言を聞かざるが如きなるや。
 憐む可し 八九十となり、齒墮ち雙眸昏く、
 朝露に名利を貪り、夕陽に子孫を憂い、
 冠を掛けては翠綉を顧み、車を懸けては朱輪を惜しみ、
 金章には腰勝へず、僂僕して君門に入るは。
 誰か富貴を愛せざる、誰か君恩を戀せざらん。
 年高ければ須く老を告ぐべく、名遂げれば合に身を退くべし。
 少時には共に嗤誚するも 晩歳には多く因循す。
 賢なる哉 漢の二疏、彼れ獨り是れ何人ぞ。
 寂寞たり東門の路、人の去塵を繼ぐ無し。

【大意】

齢七十で退官するのは礼法に明文の決まりがある。それなのに榮譽を貪る奴が、それを耳にしたこともないようなのは、どうしたわけか。彼らは八十、九十となって、齒は抜け落ち、両目もよく見えぬ。短くはかない人生を名利に汲汲として過ごし、人生の黄昏時を迎えて気にかかるは子孫の行く末ばかり。もはや退官の年ごろではあるのに、官の証たる冠を脱ぎおこうにも、翠色の冠ひもの飾りに未練が残り、お上の仕事のための車を廃そうにも朱塗りの車輪が惜しまれてならぬといった風に地位身分に未練たらしく辞められない。官の象徴たる金印は弱った腰には荷が重いというのに、曲がった背中で君門をくぐるのだ。その姿はなんとも憐れではないか。

人間誰しも富貴を愛さず、君恩に預かりたがらぬ人はいない。しかしながら、年をとれば官から退き、名譽を得られたなら身をひくべきなのだ。年若い時には皆がともに地位身分に執着する年寄

り連を嘲笑非難するくせに、自分がその年齢になると、多くの人はその地位から去り難いのだ。それにつけても賢明だったのは漢代の疏広・疏受。このお二人だけはいったいどのような方だったのか。彼らが官を辞して立ち去った後の東門の路には、その後塵を拝して同じように高潔な生き方をする人はついぞ現れなかったのである。

白居易はこの詩を含む「秦中吟」を創作した動機について「貞元・元和之際、予在長安聞見之間、有足悲者、因直歌其事、命為秦中吟（貞元、元和之際、私が長安にいて見聞したなかで、悲しむに足ることがあり、因って直截にそのことを歌い、秦中吟と題した）」⁷と述べている。ところが、この作品では老官僚一般の醜態描写という体裁になっていて、一見しては特定の人物を念頭においての批判であるようには思われない。その実、この作品は白居易と同時代のある高官をモデルにしたと見られている。秦中吟がすべて実際の見聞であることは前提であって、白居易は個別の作品ではわざと具体的人名が特定されないように描写したと考えられるのである。彼がそうしたのは、おそらく二つの理由がある。一つは、この詩は「高僕射」の詩のような顕彰ではなく、非難なので、実名を出すのは憚られたのである。次には、詩はルポルタージュのような散文とは違うので、現実にもとづきながらも、それを詩的世界に昇華することをねらったものだろう。皮肉というのは直截に表現するよりも、少しはひねって表現をぼやかしたほうが効果的なものだ。誰のことは言わないが、わかる人にはわかるよね？読者にとっても、その方が詩を読む楽しみがあるというものだ。

さて、この「不致仕」の詩において非難の矛先を向けられた人物は、時の宰相杜佑であると言われている。同時代の李肇は『唐国史補』（巻中）において、当時杜佑に対する不満があったとの観察を披露している。

高貞公致仕制云：「以年致政、抑有前聞。近代寡廉、罕由斯道。」是時、杜司徒年七十、無意請老。裴晉公為舍人、以此譏之。

高貞公（高郢）致仕の制に云く、「老年を以て致仕するのは、昔から聞くところであるが、近代になっては廉潔の士が少なく、めったにそうする者がいない」と。この時、杜司徒（杜佑）は齢七十にして、老齢の故に退官するつもりがなかった。裴晉公（裴度）は舍人だったので、この制（詔勅）を作って杜佑を譏ったのだ。

李肇の『唐国史補』は開元から長慶年間にかけての自分の見聞を記したものである。李肇は裴度、白居易及び杜佑とは同僚であり、憲宗の元和年間の同時期に任官していた。そのような同時期の同僚による観察は信憑性が高いと考えられるが、一応は確かめておかなければならないだろう。

貞元十九年（八〇三）、高郢（六四歳）は杜佑（六九歳）とともに宰相として政治の枢要に与ることとなった。『旧唐書・高郢傳』によれば、高郢は元和六年（八一）七月に亡くなり、享年は七十二である。年上の杜佑が致仕したのは元和七年、その没年は同年十一月、享年七十八であった。そうすると高郢の致仕（八〇九）に対して杜佑の場合は亡くなる直前まで現役として高位に居座っていたことになる。高郢、杜佑、裴度、白居易また李肇を含め、彼らの人間関係は互いに交錯し、全員ある一時期ともに憲宗に仕えていたことがある。してみれば、高郢の「致仕」と杜佑の「不致仕」に関して様々な評判がたったことは十分に考えられよう。ちなみに元和年間に高姓で僕射と

⁷ 「秦中吟・序」（『白氏長慶集』巻二、「諷諭二」）

して致仕したものは高郢しかいない。前章で見た「高僕射」詩は高郢を直接のモデルとして書かれたものと見て間違いのないわけである。

だとすれば、「高僕射」の詩とは対照的な「不致仕」詩も、やはり杜佑を非難する意を込めたものだと思われるわけである。「大夫七十而致事」は当時の常識である。「不致仕」の詩は榮譽を貪る者がその常識を「何ぞ聞かざるが如きや」と揶揄する。これは一見したところ、毫碌した高官連一般に対する批判であるかのように思われる。しかし前述の通り、当時は高郢と杜佑の二人の老高官が居て、一方は七十で致仕し、一方は致仕しなかったのである。この現実の下に置いて見たとき、「不致仕」の詩が対象を特定しない単なる一般的批判だとは考えにくいだろう。「高僕射」の詩は、当時の人なら誰もがすぐに「かの高貞公のことだ」と領会したに違いない。それと対になる「不致仕」の詩で具体的な人名を出さないのは、やはり憚る所があったからに違いない。だが、白居易は人名など出さなくても読者はすぐに誰を指しているのかを領会できると思っていたはずである。なお、詩には「八九十」とあり、杜佑の卒年（七十八）と合わないのでは？と疑問をもつ人がいるかも知れない。これは第一の理由としては、冒頭に「七十」とあるので、それを越えた区切りのよい数字にするのが自然だからである。だがそれよりも重要なのは、一般に詩的表現では数理的厳密性よりも、表現したい内容をいかに読者に印象づけるかが優先されるからだ。ここでは実年齢が「八九十」であることが問題なのではなく、「とんでもない年寄り」だと表現したいのである。杜佑もほぼ八十近い老人だったわけで、「八九十」は即かず離れずの、微妙な詩的韜晦表現なのだと考えられる。

それはさておき、杜佑とはどのような人物だったのだろうか。法令典章に精通していることにかけては当時の第一人者、それが杜佑だった。現代でも歴代制度に関する基礎的著作として名高い『通典』は杜佑の著作であり、当時そのことを知らぬ者はなかった。その『通典』にも「周制にては大夫は七十にて致仕す。大唐令にては諸職事官、七十にして致仕を聴す」（「致仕官篇」・卷三十三）と明記されている。そのような杜佑であってみれば、「不致仕」詩の読者が杜佑を想起しなかったと考えるほうが難しいというものだ。

実際に、杜佑はかなり年老いてからも宮中に出入りしていた。『資治通鑑』（卷二三七）に拠れば、元和二年（八〇七）、「上以杜佑高年重徳、禮重之、常呼司徒而不名。佑以老疾、請致仕。詔令佑每月入朝不過再三、因至中書議大政（憲宗は杜佑が長老で徳望があるので礼遇し、常に司徒と呼んでその名を直接には呼ばなかった。杜佑は老齢で病があることを理由に、致仕を願ひ出たが、勅令で毎月の出仕も二、三回程度でよいから、中書省に来て政治に意見を具申せよとされた）」と記されている。彼が朝廷内で重きをなしたのは、名門貴族であるばかりでなく、法令典章に精通した大学者であり、実力ある政治家でもあったからである。とはいえ、年老いても致仕しない姿に、世間或は後世から厳しい目が向けられたとしても不思議ではない。『旧唐書・杜佑傳』には、『資治通鑑』と同内容の記事の直後に、杜佑が当時随一の権勢を誇っていたことが記されている。杜佑が頻繁に樊川にある豪邸で公卿らと宴会を開き妓女の歌舞を鑑賞し、また息子らもみな朝廷に官位を得て「貴盛これと比するなし」というのである。上で紹介した「高僕射」の詩から「聖人は泰を去る」という句が想起され、そのように杜佑が致仕もせず、奢侈な生活を送っていることに対して白居易の非難を招いたのも無理はないであろう。当時において貴族が宴会で妓女の歌舞を鑑賞するなど、べつに杜佑一人の特権的行為でもあるまい。しかし、それをわざわざ皇帝に致仕を許されなかった記事の後に記すのは、やはりある種の含みがあるのではないか。いくら優れた人材であろうとも、長年にわたって特定の間人が高位を占めることの弊害を暗に示していると考えられるのだ。『旧唐

書』は唐滅亡後の五代の時代に編纂されたものだが、杜佑と同時代の人々にも同様の思いがあったはずで、だからこそ李肇は『唐国史補』であのような観測をし、白居易によって「不致仕」の詩が書かれたのである。

以上のように「高僕射」・「不致仕」両作品は、実は姉妹篇と言うよりも表裏一對と言うべきものである。白居易がこれらを書いたのは、前に述べたように、建前としては社会批判のためという儒家的理念による。しかし、白居易の置かれていた状況をさらに探って行くと、単純に第三者的立場から書いたばかりではなさそうなのだ。高郢が致仕する頃、白居易は憲宗の恩顧を受け、翰林学士として制誥を撰する職務に携わっていた。裴度の手になる「高貞公致仕表」以外にも、白居易も「答高郢請致仕第二表」を撰しており、これは高郢の「請致仕表」を受理した憲宗の意思を奉じて執筆したと考えられる。この「答高郢請致仕第二表」には次のように述べている。

援禮引年、遺榮致政。人鮮知止、卿獨能行。不唯振起古風、亦足激揚時俗。

礼法によって身を退き、榮華を遺^すてて政治の職務を主君にお返しする。(老子の教え)

「止まるを知る」を実行できるものは少ないが、高郢卿は独りそれを実践できる。それはただに古風を振起するのみならず、また現在の俗世間の人々を覚醒させるにも足るものだ。

ここでは、白居易が高郢の致仕を古の礼法に則るものとして高い評価を与えていることに注意したい。この文章は言わば皇帝の代筆ではあるが、白居易の高郢評価の基準は「高僕射」の詩、「不致仕」の詩と共通している。それはおそらく、礼法が儒教の伝統的な道德の根本であったから、に止まらないと思われる。なぜならば、白居易の生きた時代は従来の貴族階級と新興の科挙官僚階級とが拮抗していた時代だったからである。言うまでもなく白居易自身は中下層階級出身の科挙官僚であって、幼少年時代は藩鎮（地方軍閥）叛乱による社会的混乱の中で過ごし、苦学して科挙に合格することで出世の緒をつかんだ人間であった。逆に門閥貴族出身者は、苦勞することもなく恩蔭（親の七光り）で任官するばかりか、権勢維持のために長く高位に止まり続けるのである。彼らの存在が、白居易のような人間の目に如何に映ったかは言うまでもあるまい。高郢もまた白居易と同じく非門閥出身で、しかも科挙官僚として宰相にまで登りつめながら、礼の規定通りに引退した。現代でも同じ事だが、官僚の世界は上位になるほどポストは限られるのだから、高官は規定通りに退職してくれなければ、後輩たちが困るのである。以上の理由だけでも白居易がひたすらに高郢を褒め称える理由がわかれよう。そして、白居易が繰り返し高郢の致仕が礼法通りであることを持ち出すのは、そうでない連中への痛烈な批判になっているわけである。だが、白居易の高郢顕彰にはもう一つの理由があったと見られる。実は、若き白居易が貞元十六年（八〇〇）、二十九歳で念願の科挙進士科及第を果たしたときの知貢挙（主任試験官）が他ならぬ高郢だったのだ。唐代の科挙合格者、とりわけ進士及第者は、多くの受験者の中から自分を見いだしてくれた人物として知貢挙に深い恩義を感じるのが通例だった。白居易の場合も高郢は一生の恩人であり、尊敬すべき先輩として仰ぎ見ていたのである⁸。

そうしてみれば、逆に白居易が杜佑に対してどのような眼差しを向けていたかは容易に想像できる。先にも書いたように、杜佑本人は極めて優秀有能な人材ではあったけれども、彼こそはまさし

⁸ 白居易は「重題」の詩（『白香山詩集』卷十六）において次のように高郢への恩義を吐露している。「宦途自此心長別、世事従今口不言。豈止形骸同土木、兼將壽夭任乾坤。胸中壯氣猶須遣、身外浮雲何足論。還有一條遺恨事、高家門館未酬恩」という。

く門閥貴族出身者の典型だったのだ。科挙受験に苦勞することもなく恩蔭で官位につき、宰相に上りつめて七十を過ぎても「君恩」によって引退しなかった。また広大な屋敷で名士たちと宴会を楽しみ、息子たちもまた恩蔭で官位についていた。「不致仕」詩の「誰か富貴を愛さざる、誰か君恩を恋わざる」云々は、相当に露骨な杜佑への当てこすりだと読むことができるだろう。

ちなみに、現在の白居易の文集中には杜佑の退職にあたって作られた「杜佑致仕制」があり、また高郢退職の際に作られた「贈高郢官制」がある。「杜佑致仕制」における評価の中心は、杜佑が朝廷で重きをなした元勳だったことであり、「贈高郢官制」ではまた高郢を「規定年齢で致仕したのは礼と言うことができる。以年致仕、可以言礼」とその退職を褒めている。これらを分析して白居易の高郢・杜佑評価を補強できればよいのだが、いずれも偽作であるという説がある⁹。これら二篇を読むに、作者が白居易の高郢・杜佑観を参考にしているのは間違いない。

三、結び

本稿では白居易の詩を取り上げて、致仕をめぐる問題を考えてみた。彼が不致仕、即ち定年延長を一種の社会問題として諷諭詩を作った背景には、時代の大きな転換下での新旧両世代ないし階級の利害対立があったのである。今更ことごとしく言わずとも、官僚機構における人員新旧交代に関わる問題は、古来からあったに違いない。しかし、この問題が尖鋭化してきたのは、やはり白居易の時代ではないだろうか。そうだとすると、本稿で取り上げた白居易の詩は、直接には二人の実在人物の致仕問題から出発しながら、時代の問題を象徴的に切り取った作品となっていると言ってよいと思う。そしてこの問題は本質的に現代でもそのまま通用する古くて新しい問題である。ピラミッド型組織に共通する構造的な問題であると同時に、人は自分の場合は喜んで幸福を享受しても、他人が過分な幸福を享受するのを——たとえそれが過分とは限らないとしても——素直に喜べないものだという人間の性^{さが}の問題でもある。現代では年をとっても元気である限りは社会的活躍が期待されてはいるものの、高郢のようにその時が至ればきれいに辞めるのが、後々あれこれ言われぬ秘訣であろう。そのことを肝に銘じて擲筆する。

(この論文に執筆するにあたり、同志社大学の副島一郎教授より貴重なご教示を賜ったことに厚く御礼申し上げます。)

⁹ 岑仲勉『『白氏長慶集』偽文』参照。『岑仲勉史学論文集』所収。中華書局、1990年。しかし、当初の『白氏文集』の原姿に近い金澤文庫本『白氏文集』(卷三十八)に「杜佑致仕制」が収められているので、岑仲勉氏の偽作説に対してさらに考察を加える必要があると思う。

